はじめに

本書は、主として古文の記述式問題を解くのに必要な学力と技術を身につけたいと望む諸君のための問題集である。

記述問題を解く学力とは、いうまでもなく、読解力と表現力の和であり、読解力とは、語意・文法の知識はもちろん、和歌修辞・文学史・生活習慣など、古典に関する知識と、それらを文章に即して有機的に取り出すことのできる応用力との総和である。したがって、記述に必要な学力を真に充実させるには、かなりの〝時間〟と〝期日〟を必要とすることになるが、誰しもそんなに時間を持っているわけではないだろう。

そこで、本書では、国公立大学や上位レベルの私立大学をめざす受験生諸君なら、普通に身についていると考えられる「**基礎的な知識**」をベースにして、設問を解いていくうちに、必要な知識を確認し、さらに増やし、的確に解答のポイントがつかめていくように工夫をした。

記述問題は、大きく分けると、

「**解釈**」

「**説明**」

「**要約**」

の三つの類型に分かれる。

諸君は、まず、「**典型問題**」でそれぞれの型の解法を理解したうえで、「練習問題」で経験を積んでもらいたい。

著者しるす

第一章　解釈問題

一括して「解釈問題」とはいっても、問い方はいくつかに分かれる。「意味を記せ」「現代語訳（口語訳）せよ」「解釈せよ」などである。しかし、これらが要求していることには大差がないので、解答の基本的な取り組み方は変わらないと考えてよい。基本は、古語の意味と語法とを正しく押さえて、一語一語を丁寧に現代語に置き換える逐語訳をすることである。解釈にあたっての注意点をいくつか挙げよう。

1　基礎となる知識

(1)　重要古語500の習得

問題集の問題や過去の入試問題を一題ずつ解いていく中で覚えていく単語を中心にして、古文単語集で補強する。特に古今異義語や敬語が大切である。

(2)　助詞・助動詞の意味用法の習得

用言の活用は当然として、助詞・助動詞の意味用法を、文法問題集・参考書を使って、身につけておく。助詞も助動詞も習得すべきものはそれぞれ二十数個で、一日一個ずつ勉強しても一ヶ月で終わる。「に」「ぬ・ね」「なり」「なむ」「る・れ」など紛らわしい語の識別にも強くなっておく。

2 文章を解釈するときの注意

(1) **指示語の具体的内容を押さえる。**

i 指示語（「さ・さる」「かく・かかる」など）の指す内容は、指示語の前にあるのが普通だが、ときに後にあることがあるので気をつける。

ii 「人」「こと」「もの」が指す内容を、文脈の中で考えながら読む。

(2) **主語（誰が・何が）、目的語（誰を・何を）などが明示されていないところは補足する。**

i 本文の登場人物を確認する（日記や随筆では、筆者自身がその場面に登場しているのが普通）。

ii 同一人物を姓・名・官職など異なった言い方で表すことがあるので気をつける。

(3) 解答にあたっては、字数枠・解答欄の大きさに合わせて、**コンパクトな表現**を心がける。

3 和歌を解釈するときの注意

i **誰が誰にどういう状況**で詠んだ歌かを確認する。

ii 五七五七七に区切って読んでみて、途中、**句切れ**がないかを見る（歌の途中に、係り結びや終止形・命令形、それに終助詞があるとそこで句切れになる）。

iii 歌の中の**助詞・助動詞の意味**を一つ一つ押さえる。

iv **省略されているもの**（主語や目的語など）を補う。

v **語と語の関係**（どれが主語で、どれが述語か）をよく考える。

vi 掛詞や序詞などの**修辞法**に気をつける。

設問解説

問一　重要古語の意味を問う問題。

語意の問題で問われるものには次の三種類がある。

i　古今異義語…今と昔と意味の異なる語で、入試で最もねらわれる単語。
「はづかし」「おろかなり」「ののしる」など。

ii　多義語……三つ、四つの意味を持つ語で、文脈をよく見ないと意味が確定できない単語。
「文」「奉る」「ゆゆし」など。

iii　古文特有語…現代語にない言葉だが、一度覚えればかえって対応しやすい単語。
「らうたし」「なめし」「げに」など。

a　「**物しき**」は、形容詞「物し」の連体形。「物し」は古文特有語で、何か心に抵抗を感じて不愉快であることをいう。「めざわりだ」とか「気味が悪い」とか、いろいろな訳語が当てられるが、ここは女が「物しきさま」を少将に見られてしまったという文脈であるので、「見苦しい」とか「いやな」という訳が適当である。

なお、形容詞「物し」と似た単語に、サ変動詞「物す」がある。活用や接続に注意して、混同しないようにすること。

b　「**なかなか**」は「かえって・むしろ」の意味を持つ副詞。形容動詞「**なかなかなり**」とセットで覚えておくとよい。「**なかなかなり**」はもとは「中中なり」で、「中途半端だ・どっちつかずで、かえってそうでない方がましである・なまじ〜ないほうがよい」の意で用いる。